

2018年10月12日

## 『全国大学一覧』等のIR的活用とデジタル化の要請

西井 泰彦

日本私立大学協会附置 私学高等教育研究所 主幹  
(学) 就実学園 理事長

この全国大学一覧は、国公立大学にまたがる貴重なデータ集であり、私立大学に携わる者にとっては多方面の分析ができる基礎資料である。しかし、冊子の分厚さと集計しにくい体裁のため、個々の大学にとっても又は大学関係団体にとっても活用しにくい状況にあった。私が所属する私学高等教育研究所では、この中から大学ごとの学部名と各年度の定員数をエクセル表に手入力している。そうすることで次のような分析が可能となる。

第一に、全国大学一覧のデータを区分すると最近の全国的な学部等の設置動向を認識することができる。各年度の学部学科の集計数の増減数は各年度の学部等の新設と改組の結果である。どのような分野の学部学科が多く設置されているのか、類似の名称にはどのようなものがあるのか、同地域で競合している大学の改組等の動きはどうかなど、最近の学部設置の傾向を時系列的に分析することが可能となる。全国だけでなく地域的な状況を抽出することもできる。医療系、看護系の学部学科の増設動向には特に注目される。

近年、多くの大学で学部の新設や改組を検討する必要性が増している。自大学の学部学科の改組や定員の増減を検証するとともに、全国的及び地域的な学部設置や定員推移を分析することは、将来的な大学の方向性を追求するための有効な基礎資料となる。

第二に、本資料の巻末に大学に関する統計等のデータが記載されており、その中に大学の入学定員の年度ごとの増減値と集計値が記載されている。この集計値と学校基本調査に載っている入学者数を使えば国公立別の入学定員充足率の推移を算出することができる。最近では国公立大学と私立大学の充足率が逆転し、私学より国公立大学の方が定員超過となっており、国公立の定員超過抑制の必要性が増している。

このように、全国大学一覧のデータは個別大学やメディア等においても様々な活用ができる。問題は、データを整理して分析する方法が明確でないことである。また、紙媒体であるため、データの抽出や集計が極めて困難なことである。データは手間をかけて整理すれば有効な情報資料となる。大量の個別データであるからこそデジタル化し、系統分類し、並び替えることによって、分析が容易となり、傾向値も見えてくる。

私は、文教協会が発行していた時点から、この全国大学一覧をデジタルデータとし、CD-R やネットで頒布することを願っていた。私学事業団の「今日の私学財政」のようにデジタル化することで、同系統の学部の集計データを作成し、同じ地域の大学の任意の学部データを抽出できる。毎年のデータが蓄積されれば、年度比較が可能となる。紙ベースと比較にならない広範囲の分析ができる。そうなれば、各大学の IR セクションや戦略部門においてもデータを蓄積して活用する動きも始まる。現行の分厚い冊子では使い勝手が悪すぎる。いつまでもアナログ的な紙媒体を高額で頒布することは時代遅れである。